

記憶が重層化する長崎

—A Dictionary of Mutual Understanding における愛憎物語

A Story of Love and Hate in Nagasaki of Layered Memory: Jackie Copleton's
A Dictionary of Mutual Understanding

平 林 美都子

HIRABAYASHI Mitoko

キーワード：Jackie Copleton、A Dictionary of Mutual Understanding、長崎、記憶

記憶が重層化する<長崎>

どの土地にも記憶の風景という歴史がある。しかし長崎ほど「重層する記憶の風景」(葉柳6)を持つ都市は多くないだろう。芥川賞作家の青来有一は、「長崎で文学を書くときは、キリシタン・原爆・出島の3つに縛られる」と自ら語っているように、「土地の記憶からインスピレーションをえて」書き続けている¹。彼が文学会新人賞を受賞した「ジェロニモの十字架」には、対立した二つの歴史観が示されるシーンがある。市史編集委員の一人は均質な直線上を過ぎ去る時間概念を持つが、もう一人の歴史哲学者は過去が重層化する時間概念を信じている。葉柳和則が編する『長崎——記憶の風景とその表象』の序は青来のこの小説から始まり、歴史哲学者の野家啓一の物語論を重ね合わせていく(葉柳3)。「重層する過去」「重層する空間」「重層する<長崎>」へ論を進めていく葉柳の長崎論が、青来の小説と野家の物語論を「補助線」としたように、私は葉柳の序論を「補助線」として、長崎を単なる物語の背景としてではなく重層するテキストとして、イギリス人ジャッキー・コプルトンの『相互理解の辞書』(A Dictionary of Mutual Understanding, 2015)を考察したい。

葉柳は長崎の重層性を「積み重なる時間」という概念的レベルだけでなく、「マテリアルなレベルでの時を知覚しうる」と言っている(葉柳10)。彼の言葉は長崎のサント・ドミニコ教会跡・資料館を訪れたときに私がまさに感じた思いと通じる²。サント・ドミニコ教会跡は、2002年、桜町小学校の建て直しのとき発掘された遺構で、現在、小学校一階部分の一部が資料館として保存されている。ドミニコ会のモラレス神父は1609年、当時の長崎代官村山等安が寄進した土地に教会を建てた。この教会は1614年の禁教令で壊され、跡地に末次平蔵の代官屋敷が建てられたが、1676年に末次家が失脚すると、高木家の屋敷が建てられた。資料館には土層の断面の剥ぎ取りパネルが展示され、遺跡の歴史的層、すなわち、それぞれの建築物がそれぞれの文化的特徴を持っているというマテリアルなレベルでの時間の重層が確認できる。

過去が重層する時間イメージでは、各地域のそれぞれ異なった過去の層が地域固有の現在の

イメージを作り上げている。例えば、遊女は日本唯一の交易の場であった出島に出入りできた数少ない日本人だったが、それまで長崎各町に散在していた遊女屋が丸山町寄合に集められ、外国人を対象とする遊郭として開設された（宮本20）。後に詳述する明治時代の「蝶々夫人」の例にも見てとれるように、丸山には海外交易の負の側面として快樂の性のイメージがある。一方、隠れキリシタンの集落地として浦上は長らく長崎の「外」に位置しており、旧市街とは分断されていた。浦上への原爆投下は被害の少なかった旧市街地と対比されることで、隠れキリシタン（カトリック信者）の存在と関連づけられることもあった。浦上はキリシタン・原爆という特殊な歴史的事象という層を持っているのである。

コプルトンは大学卒業後の1993年、英会話講師として来日、長崎と札幌に通算三年間滞在した。コプルトンの処女作『相互理解の辞書』の日本人語り手、高橋アマテラスは、物語上設定された現在である1983年、アメリカのペンシルヴァニアに住んでいるが、実際の語りの大半は長崎市内が舞台となっている。アマテラスは原爆により一人娘ユーコと七歳の孫ヒデオを亡くし、その喪失感から、戦後まもなく夫ケンゾウとともに長崎を離れてアメリカに移住した。夫の死後は娘を亡くした悲しみを飲酒で紛らわしながら一人暮らしをしている。81歳になるアマテラスの元に、ある日、孫の「ヒデオ」³だと名乗る40代の男性が訪ねてきた。ひどい火傷によって顔が変形したその男は、アマテラスが長年憎んできた佐藤ジョーメイ医師の養子として育てられたことを告げた。彼を孫だとにわかには信じることはできなかったが、彼の訪問は彼女が長年封印していた過去を遡るきっかけとなる。今まで開くことさえなかったユーコの記事と、「ヒデオ」から渡された亡きユーコに宛てたジョーメイからの手紙を読みながら、アマテラスは今まで隠蔽してきた過去とユーコに対する自分の態度とに向き合わざるをえなくなる。母娘二代にわたって一人の男性と恋愛関係を持ち、その結果、嫉妬心が混じり屈折した母の愛情が娘の死の遠因になったことを彼女は直視していくのである。

長崎は浦上地区と旧市街に分断されている。爆心地の浦上は隠れキリシタンの記憶、旧市街地は文化・経済交流、軍事産業の記憶、そして丸山や新地中華街には女の性の記憶が立ち現れる。『相互理解の辞書』はキリシタン・原爆と女の性のテーマが織りなす物語である。重層する長崎の時間と各地域の固有のイメージが作品にどのような意味を付与していくのだろうか。

後悔と謝罪の記憶物語

『相互理解の辞書』は「ヒデオ」がアマテラスのアメリカの家を訪問した1983年から始まる。「ヒデオ」の来訪をきっかけに、アマテラスは衣装タンスの奥に長年隠し続けてきたユーコの記事を取り出した。娘の記事は、ジョーメイと初めて会った1936年7月29日から不義の子どもを身籠って悩む1945年8月8日、すなわち原爆死する前日までの9年間にわたっている。一方、毎年ユーコの命日に彼女に宛てたジョーメイの手紙は、1946年8月9日から1972年8月9日までの26年間に及ぶ。この手紙はジョーメイの妻であり「ヒデオ」の養母ナツが亡くなる直前、アマテラスに渡すようにと「ヒデオ」に託したものだ。最後の手紙を書いた数ヶ

月後、ジョーメイは白血病で亡くなった。大戦時でもあり、しかも原爆という歴史的な事象が背景にあるため、小説中の年月日は特定されている。アマテラスの記憶物語の日付の奇妙なほどの正確さはこれらの日記と手紙に拠るものである。

娘の日記を夫の死後も隠し続けていたことから推察できるように、当時の娘の恋愛にまつわる出来事はアマテラス自身からも隠蔽しなければならないことだった。その理由として、生き続けるために「自分の過去の編集版」(6)や「嘘や削除」(7)が必要だったとアマテラスは認めている。ユーコとジョーメイの恋愛にアマテラスも当事者として関わっていたことをうかがわせる言い回しだが、この時点ではそれは明らかにされていない。ユーコの日記とジョーメイの手紙はアマテラスの記憶のギャップや思い違いだけでなく、自分の「嘘や削除」のない、「編集」されない過去を徐々に露わにしていく。もちろん、日記や手紙が事実というわけではない。それらもまた記憶の所産であり、「記憶とは事実とフィクション」(7)なのだから。とはいえ、二人の日記と手紙は彼女が記憶の裏に隠してきたものに眼を向けさせていくのである。

物語の冒頭から、ユーコの死に対する語り手の責任、後悔、謝罪の言葉が繰り返される。

ユーコがどのように死んだのかではなく何故死んだのかに絶えず悩まされている。もし私がこの話を語る最後の生き残りであるなら、何をどの程度自分や他人に告白できるだろうか。まず認めなければならないのは、私がいなければ娘は今ここに生きていたかもしれないということだ。無私の母性愛から出た行為だと言えるが、結果を見ればそんな動機はどれほど重要だろうか。暗い真実はこうだ。もし天主堂で会おうと私がい言い張らなければ、娘はあそこに行かなかっただろう(5)。

「無私の母性愛」から浦上天主堂で娘と待ち合わせをしたことに、アマテラスがなぜそれほどまでに罪悪感を持つのか、そもそも母性愛からの行動とは何を指すのかはこの段階で読者に明かされない。ユーコがジョーメイと出会い恋したのは16歳。かつてアマテラスがジョーメイに恋したのも同じく16歳であり、情事の場所も同じく新地中華街のいかがわしい宿だった。アマテラスには娘の不義の恋愛が自分の昔の恋愛を追体験しているように思えたが、両者には決定的な違いがあった。婚約者がいたジョーメイにとりホステスのアマテラスは遊びでしかなかったが、妻帯者の身でありながらも彼はユーコを本気で愛していたのである。しかし、娘と自分の恋愛の相似性にだけ目を奪われていた彼女は、男の真の気持ちを理解できていなかった、あるいは本心は、彼が娘を本気で愛していたことを信じたくなかったのではないだろうか。

逸脱していく介入行為

娘がジョーメイとの恋愛をあきらめるために、アマテラスは四回にわたって二人の間に介入する。その行為は徐々に巧妙になり、単なる介入を超えたものになっていく。最初の介入は、ジョーメイをユーコから離れるように仕向けることだった。アマテラスは、ジョーメイと友人

だった夫を二人の情事の現場に行かせ、娘と別れること、長崎から出ていくことを彼に約束させた。ケンゾウは情事現場に乗り込むという自分の行為を恥じたが、アマテラスは「これは母としての私の義務だった [中略] 娘を想ってのことで他意はなかった」(79) と、あくまでも自分の行為を正当化している。しかし、こうした正当化の発言は逆に何らかの「他意」があることをほのめかしてしまっている。

アマテラスの第二の介入は、ユーコがシゲと見合いした後のことである。ジョーメイに未練を残しつつも、ユーコは真摯な態度で接するシゲによって徐々に平穏な気持ちを取り戻していった。しかしアマテラスは、未だ長崎から出ていかないジョーメイの存在が「簡単に手の届く脅威」(116) に感じ、心が落ち着かなかった。「彼がユーコに与えた苦痛に対して暴力でもって痛めつけたかったが、それができないのであれば、永遠に彼から自由になりたかった」(113) アマテラスは、ジョーメイと直談判という第二の行動を起こすことになる。「17年ぶり」の再会だという認識、彼の「同じあの気取った歩き方」(117) に「いまだに欲望を感じる」(117) 気持ち、さらにアマテラスの指の上に手を重ねるといふ彼の行動から、二人のかつての親密な関係が明らかになってくる。長崎から出ていかなければ彼の不倫を妻や職場に話すと言文句を口にするアマテラスに対し、ジョーメイは彼女の過去をばらすと応酬した。しかし決定打となったのは、アマテラスが「自分の若い頃のすべて」(119) をユーコに話すという脅しだった。これがジョーメイを屈服させることになったのは、彼にとってアマテラスとの過去の関係を一番知られたくない相手はユーコだったからである。

三度目のアマテラスの介入は手紙の偽造である。シゲとユーコの結婚式の朝、ジョーメイからの手紙をたまたま受け取ったアマテラスは、それを娘に見せなかった。ユーコへの想いを綴ったジョーメイの手紙を読み、アマテラスは娘に代わって、捨てられた「苦痛」が「怒り」になったこと、彼への「拒絶心」が「憎しみ」になったという返信を書く

そう、一度は彼を愛したことがあったかもしれませんが、もう愛しておりません。彼の行動から私が彼にとってどの程度のものなのか分かりました。取るに足らないもの。彼は私を捨てました。あれは彼の決断だったのです。彼は他の誰かを責めることはできません。私を愛してくれたことなどなかったに違いありません。そうでなければ手紙で私を納得させてくれたでしょう。どうかもう私を苦しめないでください。離れていてください。彼のせいで私はとても辛い経験をしましたが、誠実で幸せにしてくれる夫を見つけました。自暴自棄になって彼の代わりの人と結婚するなどというお考えはおやめください。(166. 下線は筆者)。

ジョーメイとの縁切りを告げる偽造の手紙は本文中ではジョーメイを「彼」とする間接話法で書かれているため、「私」であるユーコは必然的にアマテラスと重なってしまう。しかしこれこそが、アマテラス自身の心情を露わにしているのである。

アマテラスの手紙の工作は、図らずも八年後に二人の恋心を再燃させる原因となった。出征したシゲからの連絡が途絶えて生死が判然としなくなった1945年、ユーコが看護師として働く長崎医大病院にジョーメイが戻ってきた。初めは再会に戸惑う二人だったが、八年前の手紙がアマテラスによって偽造されていたことが分かったと、たちまち男女関係が復活した(191)。原爆の二日前、ジョーメイの子を身籠ったことをユーコから告げられたアマテラスは、中絶の決断を迫り、8月9日11時に浦上天主堂で娘と会う約束をした。その一方でアマテラスは、丸山のバーでジョーメイと待ち合わせ、四度目の介入、それも大芝居を打つのである。アマテラスはジョーメイに捨てられた直後にケンゾウと結婚したこと、その後生まれた子どもの年齢からユーコがジョーメイの実子であることを暗に示唆し、二人の（近親姦）関係を清算しなければユーコに告げると脅迫したのである。

アマテラスの介入には母性愛だけではなく、自分を捨てた男への恨みの感情が含まれているのは明らかだ。だからこそ介入行為には、二人を引き離すだけでなく男を苦しめるという目的も付随しており、手紙の偽造、嘘の告白、さらには脅迫へと徐々に逸脱した行為になっていったのである。

長崎ガイドブック

『相互理解の辞書』において、過去が顔を出すということは、長崎の街が姿を現すことを意味している。アマテラスの記憶、ユーコの日記そしてジョーメイの手紙の中で、登場人物たちは長崎市内を電車で移動したり歩いたりする。電車の停留所、寺社仏閣、教会、墓地、学校などの固有名詞が列挙された『相互理解の辞書』は、ある意味で長崎のガイドブックの様相を示していると言ってもよい。こうした具体的な地名、建造物名が挙げられることで、それぞれの土地に層を成す歴史的意味が立ち上がり、「現在のただ中に[過去が]顔を露出させている」（野家171）のである。この作品で興味深いのは、過去の記憶が重層する土地がそこを訪れる人物に象徴的な意味を付与しているという点である。

まず丸山である。長崎の丸山は大坂の新町、京都の島原、江戸の吉原、伊勢の古市と並ぶ五大遊郭の一つと言われ、この地の遊女の歴史は古い⁴。『相互理解の辞書』の表紙絵が遊女であることも、物語のテーマが快楽の対象である女の性という丸山の歴史的イメージを強調している。医師のジョーメイは16歳のアマテラスと丸山のバーで出会った。ジョーメイとユーコの恋が再燃する場所も、彼らの関係を清算するためにアマテラスとジョーメイが取引する場も丸山である。丸山には快楽の性という過去が常に顔を覗かせている。

次に新地中華街を見てみよう。元々は福建省からやってきた中国人の居留地は唐人屋敷だったが、17世紀に唐人屋敷前の海を埋め立てて造成したのが新地中華街の始まりである。1859年に長崎港が開放されて唐人屋敷が廃墟となった後、中国人は新地に住むようになった。戦前の場末の中華街の連れ込み宿は、ジョーメイとアマテラス、彼とユーコの情事の場所だった。婚外の性の営みという快楽と結びついた「中華街」は三人のそれぞれの記憶、日記、手紙の中

で何度も想起されている。

同じく中国人街でありながら、新地中華街と対照的な場所が唐人屋敷跡である。廃墟となった後に残っているのは天后堂、媽祖堂、土神堂、観音堂ぐらいであるが、明治期のオランダ坂の外国人屋敷ともども、世界との経済・文化交流の歴史が姿を現す土地である。シゲがユーコとの交際中に散策するのはこの界限であり、ジョーメイと結びつく地域とは異なった過去を持つ長崎といえよう。出島を散策するとき、シゲはユーコに初期の長崎のグローバルな交流史について語っている。

彼は貿易、産業、冒険によってこの地にやってきた外国人たちのことを語った。西洋からはキリスト教徒、東洋からは中国人[中略]。ユーコは彼の話聞き、木や金属や石のマテリアルな構造の間に土台となって存在する人間たちの価値を理解し始めた(107-108)。

二人が好んで訪れる稲佐国際墓地は外国人用墓地である。世界に開かれた土地を散策するシゲは、自分たちの未来を世界に向けている。首相や政治家の暗殺(二・二六事件)のピラを読んだ後、シゲは当時の狭量な国粹主義を次のように批判する。

海外へのこうした野心は異文化を吸収することではなく、それを自分のものにしようと武力行使をすることのようだ。僕たちの大帝국을築くために必要な犠牲について聞かされる。でも僕や君や普通の人々はどうなるんだ。個人やその家族に対する責任はどうなるんだ。日本に対する血の恩義の方がもっと大事だということか？ (115)

侵略して異文化を所有することで自国に同化させてしまうのではなく、異文化を吸収して学ぶことを、そして国家よりも個人や家庭を優先するシゲの価値観は、近代的、西洋的個人主義を礎にしているといえる。

浦上地区には禁教令の間280年余りにわたって信仰を守り続けた信者たちの集落があった。1865年、浦上のキリシタンたちは完成したばかりの大浦天主堂を訪れ、プティジャン神父に自分たちの信仰を告白した⁵。1925年に建設された浦上天主堂は東洋一の壮大な規模を誇っていたが、シゲとユーコの結婚式、さらにシゲの葬式が浦上ではなく大浦天主堂で行われたことは、場所の象徴性から意味があるだろう。浦上の秘密・隠し事とは対照的に、大浦は秘密の開示、公示性を象徴するからである。そしてシゲはまさしく秘密のない信頼できる夫だった。

一方、ジョーメイの勤務地であり、またシゲとの結婚後、ユーコが看護婦として働いていた長崎大学病院は浦上地区に位置している。夫と同じカトリックに改宗したユーコは浦上天主堂に通い、胎児を中絶するかどうかの決断を母に告げるため、原爆投下時刻にそこで待ち合わせをしていた。浦上は隠れキリシタンが信仰を外に漏らさず暮らしていた地域であり、その土地

は秘密や隠し事の記憶を持っている。すでに見てきたように、ジョーメイは婚約者や妻に不倫という隠し事をしてきた。アマテラスは神の前で娘の決意を語らせるために浦上天主堂を選んだが、原爆によってそれはかなわなかった。ユーコが中絶するかどうかの決意を語らなかった／語れなかったことは、浦上の象徴性と通じている。

長崎を表象する文学とインターテキスト

原爆のイメージが強烈な長崎は、文学作品においては当然のことながら原爆被害地として表象されることが多い。コプルトンも言及している永井隆の『長崎の鐘』は英訳本 (*The Bells of Nagasaki*, 1949/1994) もあり、原爆被害の生々しい情景を描写したノンフィクションでありながら、文学作品としても読まれているものである。原爆文学ではないが、長崎を表象する英語圏文学として一番知られているのは、やはりカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) の『遠い山なみの光』 (*A Pale View of Hills*, 1982) だろう。そしてこれは『相互理解の辞書』が一番影響を受けている作品でもある⁶。イシグロの作品もイギリスに住む日本人エツコによる一人称語りであり、戦後10年ほど経った長崎市郊外の生活を回顧している。『遠い山なみの光』はエツコだけの記憶から語られているため、日記や手紙と対話的にストーリーが進む『相互理解の辞書』と違って、年月日に関しては曖昧である。しかし、過去の詳細は『遠い山なみの光』では必要ない。むしろ現在の語り手の心情が中心なのである。エツコと長女との関係は、回想の中のサチコとマリコの母娘関係の相似であり、サチコへのかつての懸念や問い質しは、そのままエツコ自身を内省する言葉となっているのである。

長崎を表象する文学として忘れてならないのは、『蝶々夫人』 (*Madame Butterfly*, 1898) である。没落した武家の娘、蝶々夫人とアメリカ海軍士官ピンカートンとの悲恋物語は、元々アメリカ人の弁護士だったジョン・ルーサー・ロング (John Luther Long) の短編小説で、デイヴィッド・ベラスコ (David Belasco) が戯曲化したものをプッチーニ (Giacomo Puccini) のオペラにより一躍有名になった⁷。当時のジャポニズムの大流行のただ中で作り出された蝶々夫人の表象は、以後、西洋で定着していくことになる。現地妻である蝶々夫人の人生は、アメリカ人の愛人に依存して翻弄される『遠い山なみの光』のサチコの人生とも通底する。また、蝶々夫人の息子がピンカートン夫妻に引き取られるように、『相互理解の辞書』のユーコの息子である「ヒデオ」もジョーメイ夫妻に引き取られる。もちろん、ヒデオの父親はシゲであるし、火傷を負い「ヒデオ」を名乗る男児が本当にユーコの息子であるかどうかも定かではないという違いはあるが、そこにインターテクスチュアリティを見て取ることは可能である。『相互理解の辞書』における「蝶々夫人」のイメージの頻出は意図的な伏線となっているからだ。例えば、初めてユーコと関係を結んだときジョーメイは彼女を「蝶々さん」と呼んだ (58)。二人の情事現場が押さえられた直後に彼は「蝶々さん、君を放さない」 (86) という言葉を残している。また、シゲがグラバール邸で上演される予定の『蝶々夫人』について言及したとき、ユーコはジョーメイとの関係を思い出し、「蝶々さんのように妊娠したらどうなるだろう」 (105) と不安を感

じている。皮肉にもその八年後、彼女の不安は現実となる。このように女の性をテーマにした「蝶々夫人」は「丸山」と並んで、重層化する長崎のイメージの一つになっているのである。

加害行為と罪悪感

長崎原爆はアメリカ軍の当初の計画とは外れた場所に投下された。第一目標地は福岡県の小倉だったが、当日の気象状況から見通しが悪いため、長崎に目標を変更した。いずれの都市でも軍事工場地帯がターゲットになっていた。ところが長崎でも雲が邪魔をしたため、実際の爆心地は山間の集落の浦上となってしまった。浦上は1920年までは長崎郊外の郷村であり、旧市街とは地理的のみならず歴史的、宗教的にも一線を画していた（富永139-40）。すでに記したように、浦上には隠れキリシタンの集落があり、旧市街の住民からは「差別的なまなざしを向けられていた」のである（富永139）。その地域への原爆投下、さらに金毘羅山の防壁により旧市街への被害が少なかったことが長崎の分断を強調することになった。被爆地として「長崎」をひとくくりにはできない理由はそこにある。浦上のキリスト信者6000人は原爆によって即死した。これを浦上の歴史的、宗教的特殊性と関連づけて、原爆投下を神の摂理、戦死者は神への生贄だとする「燔祭説」まで登場した⁸。浦上から発信する原爆禁止運動がキリスト教の平和思想と結びついていくのはこうした事情からである。

この分断により長崎を一律に被爆地として表象することは難しい。その上、日本は原爆の被災国なのだが、その原因となる戦争の加害国だという事情もある。太平洋戦争に先立ち日本は中国に侵略した。『相互理解の辞書』のジョーメイは、ハルビンのピンフォングで石井部隊の一員として中国人を対象に人体実験を行っていたことを、手紙の中で告白している⁹。出兵したシゲも上官の命令で捕虜を殺したことを、泣きながらユーコに打ち明けている。鉦山技師のシゲは出兵前、軍艦島（端島）で石炭採掘に関わっていた。ケンゾウが働く三菱造船所と同様に、当時の石炭採掘は軍事産業の一部だった。当時の端島の炭鉱では戦時中の労働者不足のため、朝鮮半島から徴用される女・子どもに強制労働をさせていた。いいかえれば、医学や工学技術という日本の近代化を進める科学は、戦争の加害行為に加担していたのである。長崎の軍事工場が原爆の投下地として狙われるのには理由があった。そして浦上地区はその巻き添えを食った、正確に言えば、身代わりとなったのである。

長崎と浦上の分断はアマテラスとユーコにも当てはまる。アマテラスは浦上天主堂でのユーコとの待ち合わせ時刻に間に合わず、市街地で生き残った。もちろん彼女がユーコに「差別的なまなざし」を向けていたわけではない。しかしすでに見てきたように、自分は捨てられたのに娘が愛されていることに対して悔しさや嫉妬心はあったはずだ。それがジョーメイへの恨みの感情を増幅していったのであろう。ジョーメイとの逢瀬を綴るユーコの日記を30数年後に読みながら、アマテラスは「ユーコを羨ましく思う」（58）自分の嫉妬心を恥じている。娘のため、という母親の大義名分は確かにあるものの、二人の関係を断ち切るための介入も「永遠に自由になりたい」（113）自分のためだったし、8月9日に浦上で会う約束をしたのも、娘の

心情に考慮せず、中絶を決断させるためだった。結局、アマテラスは自分の復讐のために娘を利用したのだった。前もってユーコがジョーメイの娘であるという虚言をほのめかし、彼の方から関係を断つように仕向けたのもそのためである。近親姦がジョーメイに徹底的な打撃になることもアマテラスの思惑どおりだった。ジョーメイは手紙の中で「我々二人[アマテラスとジョーメイ]がユーコを浦上天主堂へ」すなわち爆心地近くへ「追いつめた」(256)ことを認めている。長崎（軍事工場）の代わりに浦上が犠牲になったように、ユーコは母とジョーメイの愛憎の犠牲になったのである。

被災地域や国がその被害を集合的記憶として留めることは容易だが、加害行為を集合的記憶とすることは難しい。共同体が前進するためには加害行為は忘却させられることもある。集団的な加害行為はせいぜい個人のレベルでの罪の自認でしかない。人体実験に加担したというジョーメイの告白も死者宛の手紙という日記同様の形で行われ、公には聞こえない。被災国日本が隠蔽しようとしてきた加害行為や分断した長崎の記憶は、アマテラスの複雑な心中を映し出しているのである。

新たな長崎の層と忘却の意味

7歳のヒデオは通っていた山里小学校（当時は国民学校）で原爆被害に遭った。たまたま爆撃による火事で大火傷を負って顔がまったく変わり、過去の記憶もなくしてしまった一人の男児がいた。その被災児が「ヒデオ」という名前を思い出したことから、ジョーメイはユーコの子どもだと信じてその男児を養子にしたのである。記憶を取り戻さない「ヒデオ」はユーコとシゲの息子だというアイデンティティと過去を与えられた。ちょうど映画『ブレードランナー』のレイチェルというレプリカントが、人間としての記憶を作られたように、だ。

「ヒデオ」に連れられて37年ぶりに長崎に戻ったアマテラスは、平和公園を訪ねた。1983年の浦上は戦後の復興を遂げ、「観光地」から「聖地」へと変身していた（富永152）。長崎市はかつて分断していた浦上地区とその歴史的な遺産を吸収して発展していた。しかし、アマテラスはユーコが死んで自分が生き残っていることへの罪悪感から、いまだに解放されていない。かつてこの地は日本二十六聖人が処刑され（1597年）、その後、島原の乱（1637年）では37,000人もものキリシタンが殺された。アマテラスは「なぜ自分たちは生き残ったのか」「なぜ彼らは殺されたのか」「なぜ神はそれを許したのか」(267)という生き残りの信者たちの思いに、自らの想いを重ねている。

アマテラスがこうした罪悪感から解放されるのは、昔住んでいた家を訪問した後である。居住者は変わっていたが、家は昔のままの姿だった。かつてユーコが使っていた二階の部屋の窓下の壁には、ユーコが描いた蝶の絵の跡が残っていた。この蝶は女の性に縛られた悲恋のヒロインの「蝶々夫人」とは違い、窓から飛び立つ自由を象徴している（286-287）。羽ばたく蝶は実はシゲとの結婚式の日にも見かけた（160）。戦争がなければ、シゲが徴兵されなければ、原爆が落とされなければ、ユーコは蝶のように羽ばたいていたかもしれない。しかしそれで

も、ユーコが描き残した蝶の絵や「竜がしゃべっている」(287)と彼女が信じていた竜の頭の形をした庭木の枝は、彼女が生きていたことを「マテリアルなレベルで知覚しうる」(葉柳 10)ものだった。ここにおいて「過去は現在に接続し、現在のただ中に顔を露出させている」(野家 171)のは比喻表現ではない。アマテラスはユーコが描き、眺めた物に生きた証を認めたのである。

重層する長崎は隠れキリシタンや原爆などの、死や罪という負の層だけではない。アマテラスの罪悪感は原爆で象徴される長崎とともに隠蔽されてきた。しかしようやく彼女は「長崎の上に被せた経帷子を取り除いて」、死のイメージから解放させた(287)。そして「ヒデオ」とアンジェラ夫妻の日米二世の子どもたちとの親密な関わりが、新しい生、新しい長崎の層となるのを信じたのである。「家、レストラン、売春宿、パチンコ店、病院、寺、神社、教会、街灯」という現在の長崎は、「今の我々に、欲望するものに、信じるものに、愛するものに、我々の人生が向かっていくものに、向かっていかないものに、我々を繋ぎとめている」(288)。「向かっていかないもの」とは想像上のユーコの将来の姿であろう。長崎は重層化した過去を持つ。しかしアマテラスを多様なものに繋げてくれているのは現在の息づく長崎である。例えばユーコの本当の息子ではないかもしれない「ヒデオ」にと。出自はもはや問題ではない。「ヒデオ」は紛れもなく原爆の生き証人であるが、記憶のない彼は過去ともユーコとも繋がることはできない。それだからこそ彼は原爆の過去を乗り越え、「長崎の過去の在り様ではなく、現在の在り様」を、つまり「許しと平和」を体現しているのである(288)。自由に未来を志向する「ヒデオ」という贈り物を、ジョーメイからアマテラスは受けとった。重層する過去とは連綿とした繋がりではなく、断絶しながらも層を成していくのである。

本論文は 2021 年度愛知淑徳大学特定課題研究助成費による研究成果発表である。

注

1. 土門稔によるインタビュー。
2. 2018年2月と2021年10月に訪問。
3. ユーコとシゲの息子ヒデオと区別するため、本稿では「ヒデオ」とした。
4. このうち三大遊郭と呼ばれたのは新町(大阪)、島原(京都)、吉原(江戸)だった。
5. 「信徒発見」の出来事は東洋の奇蹟として知られている。
6. “A Conversation with Jackie Copleton”の中でコブルトンは、長崎をベースにした小説として、『遠い山なみの光』以外にデイヴィッド・ミッチェルの『出島の千の秋』(2010)とエリック・ファーユの『長崎』(2010)とを挙げている。前者は18世紀末から19世紀にかけての出島のオランダ商館を舞台にし、オカルト的宗教とロマンスのメイン・プロットに、不正な取引で懐を肥やすオランダ商人、西洋の近代知識を求める日本の学者たちのサ

プロットと入り組ませた歴史小説である。一方のファーユの『長崎』は、気象庁に勤める中年の男の家にホームレスの女がこっそりと住み込み、それが発覚して捕まる話で、日常生活に起こる不条理な出来事を描いている

7. 興味深いことに、ジョン・ルーサー・ロング（John Luther Long）もペンシルヴァニア出身である。
8. 長崎への原爆投下は神の摂理であり、被害者を神にささげる犠牲（生贄）と解釈して、生き残った被災者たちはその試練に耐えなければならないと提唱した永井隆の思想は、1980年代に高橋眞司によって「浦上燔祭説」と名付けられ批判された。高橋の批判については四条知恵『浦上の原爆の語り』（48 - 55）を参照のこと。
9. 石井四郎の七三一部隊とも呼ばれ、生物兵器の研究や開発を行なった。A *Dictionary of Mutual Understanding* には炭疽菌、チフスなどの病原菌の研究や細菌爆弾製造工場についてや、人体実験の対象者をマルタ（丸太）と呼ばれることについての言及がある（194）。

使用文献

- Copleton, Jackie. *A Dictionary of Mutual Understanding*. Windmill Books, 2015.
- , "A Conversation with Jackie Copleton." *Compulsive Reader*, November 13, 2015.
- Faye, Éric. *Nagasaki*. Editions Stock, 2010. 『長崎』松田浩則訳, 水声社, 2013.
- Ishiguro, Kazuo. *A Pale View of Hills*. Faber, 1982. 『遠い山なみの光』小野寺健訳, ハヤカワepi 文庫, 2001.
- Long, John Luther. *Madame Butterfly*. 1898. Rise of Douai, 2013.
- Mitchell, David. *The Thousand Autumns of Jacob de Zoet*. Random House, 2010. 『出島の千の秋』土屋政雄訳, 河出書房, 2015.
- Nagai, Takashi. *The Bells of Nagasaki*. Translated by William Johnston, Kodandsha International, 1994.
- 四条知恵『浦上原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』未来社, 2015.
- 青来有一「ジョロニモの十字架」『聖水』文春文庫, 2004.
- 永井隆『長崎の鐘』アルバ文庫, 1995.
- 富永佐登美「観光都市における被爆の表象——地図に描かれる長崎を例として」『長崎——記憶の風景とその表象』葉柳和則編, 晃洋書房, 2017, pp. 133-159.
- 土門稔「長崎に生まれ長崎を書き続ける 芥川賞作家・青来有一さんインタビュー（1）」『Christian Today』2017年2月13日
<https://www.christiantoday.co.jp/articles/23227/20170213/seirai-yuichi-1.htm>
2019年1月15日閲覧。
- 野家啓一『物語の哲学——柳田國男と歴史の発見』岩波書店, 1996.
- 葉柳和則『長崎——記憶の風景とその表象』晃洋書房, 2017.

宮本由紀子「丸山遊女の生活——「長崎奉行所判決記録犯科帳」の分析を中心として」『駒沢史学』31, 1984, pp. 19-46

映画『ブレードランナー』リドリー・スコット監督, ワーナー・ブラザーズ, 1982.